

【論文】

小学校高学年児童における学校内の危険な場所の評価と特定について

河合美保¹・村越真²¹ 静岡大学教育学研究科後期3年博士課程・² 静岡大学大学院教育学領域

要約

本研究の目的は小学校高学年児童（5年・6年）の「危険」の特定・評価・環境構造の差について学年による違いを捉えることである。実験は小学校内の工事が施工されている校舎や校庭及び工事箇所ではない学校内の危険な場所と考えられる場所の写真及び平面図をみて、危険度の評価、一番危険な場所の特定、なぜ一番危険だと考えるかの理由について尋ねた。結果は危険度の評価については学年差が見られる場所が存在した。一番危険な場所の特定については写真課題では学年差は見られず工事現場と明確な区切りのない場所の写真が選ばれた。平面図課題では危険な場所の指摘については学年差が見られなかった。一番危険だと考える場所については、学年差に関する有意傾向が認められた。以上から6年生は危険な場所はあるとしても自分が立ち入る場所には危険はないということを認識している子が多いが、5年生にはそのような考え方はほぼ見られず、6年生は危険に対してのメタ認知が働いているのではと推測される。このような危険に対するとらえ方の違いが学年差として現れる結果となったと思われる。

キーワード

小学校 危険 評価 特定

1. 序言

学校安全は、学校保健安全法や学校安全の推進に関する計画において、「安全教育」「安全管理」「組織活動」の3本柱で構成されている。特に「安全教育」においては、安全教育の充実を図ることを主な目標の1つとして掲げており、安全に関する知識とともに行動する態度の視点を身に着けることが求められている。文部科学省の「現行の学習指導要領における食育・安全教育・性教育に関する指導」において、各教科における安全教育に関する主な内容は、理科は「自然災害と関連付け」ること、生活科は「地域の人々や場所と適切に接すること、安全に生活すること」で、社会は「社会と安全のかかわり」についてであり、保健体育は「危険を予測し、回避すること」で、特別活動では「安全な生活態度の育成、学校行事の健康・安全・体育的行事における安全な行動」とされており、各教科の中においても安全に関する知識や安全に行動する態度の視点を考えるよう配慮されている。

では子ども達は実際に安全な生活を送るために危険を予測し、回避できるための知識や行動は身につけることができているのだろうか。また、それ以前に「危険」という認識ができているのだろうか。危険と一言でいっても、学校生活における危険は多くの種類がある。本研究においては危険発生要因（ハザード）が空間に存在し、かつ自分自身もしくは友達がケガをする可能性のある危

険を取り扱うこととする。本研究で明らかにしたいのは、子ども達が多くの時間を過ごす学校という空間についてどのような危険が存在すると考えているのかを知ること、またその危険をどのように評価をしているかである。

危険に対する判断については、かなり早期からできるといわれている。Gibsonの視覚的断崖の実験にもあるように、乳児の段階から危険に対してはかなり適切な判断を行うことができる。自分自身で判断が難しい危険に遭遇したときは、Tamis-LeMondaら（2008）の幼児が危険な行動をするか否かについて母親という社会的情報をどの程度判断材料に用いるのかについての実験がある。幼児は基本的には自分の知覚情報を頼りに行動選択をするが、どっちがいいのか判断が難しい場面では社会的情報（母親の態度（呼びかけ）等）を判断材料とすることが明らかとなった。このような先行研究の結果からも小学校児童の段階であれば、危険に対する判断というのはかなり正確に行えることは予想できる。ただしTamis-LeMondaらの実験のように実際に目の前に危険な状況がありそれに対する判断が求められるものと、目の前にはない場所において危険が起こるか予測し判断することでは、後者の方がより複雑な思考過程が求められることも予想される。

子どもの危険回避に関する研究は防犯に関する視点からのアプローチがほとんどである。防犯、つまり見知ら

ぬ人物という危険から回避することが主眼に置かれている。見知らぬ人物という危険を察知した場合、その危険から回避する行動は何歳くらいから行うことができるかについては、5歳前半と5歳後半の間に「第二次認知革命」があり、メタ認知機能が発達しプラン連携能力も働くようになり、(内田 1985) 5歳後半になると、未知人物からの誘いや緊急性の高い場面においても誘いに応じず危険回避行動を取ることができる(内田 2010)と言われている。また、見知らぬ人(ストレンジャー)から助けを求められる場面での子どもの選択行動については、幼児(5.6歳)・児童(小学1.2年)いずれの年齢群においても危険回避を優先させるが、子ども自身とストレンジャーの欲求の方向性が一致している場合は見知らぬ人について行くと回答しやすい(清水 2010)とされている。また未知の人の接触場面での危険性と適切な行動が何歳くらいでできるようになるかについては、小学1年以上(6~7歳以上)であることも明らかになっている(江尻 2010)。

以上の先行研究の結果から、子どもはあからさまな危険の判断はかなり早い段階からできるが、判断に迷う微妙な状況や自分の欲求が伴う場合は、自分自身で適切な危険回避の判断が行えなくなるようである。しかしながら、先行研究における対象児は幼児から小学校低学年までがほとんどであり、小学校中学年、高学年を対象にした研究はほぼ存在せず、どのくらいの年齢になると判断に迷う微妙な状況や自分の欲求が伴う場合に適切な危険回避の判断が行えるようになるのかの検証はされていない。今回は判断理由等の記述が比較的容易と思われる小学校高学年(5.6年)を対象と選ぶことにより、判断理由の詳細を捉えようと試みた。

スポーツ振興センターの学校事故事例検索データベース(http://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/anzen_school/tabid/822/Default.aspx)を見ると小学校では休み時間のケガが非常に多く、子どもが危険と遭遇するのは教室内外の空間であることが多いと考えても差し支えないだろう。このことから本研究における実験刺激は教室外の空間を用いている。

本研究では実験刺激として改装中の校舎という非日常的な学校生活場面を取りあげた。子ども達が危険をどのように評価しているかを調べるには、直接教員から危険な場所であると指導を受けてない場所において、危険に対する判断が汎化されているかを抽出しやすいと考えたためである。実際の学校内では、あからさまな危険箇所というよりは、危険か否か判断に迷うような微妙な場所や状況に遭遇することが多いことから、小学校高学年(5年・6年)の間においても判断理由に差異が認められる可能性もある。

2. 本研究の目的

改装中の校舎を場面とすることで、児童が新奇な非日常的場所に対して、何を危険だと思っているかを調べることで、児童の危険特定・評価・環境構造の差の特徴を把握するとともに、それに影響する学年差や性別などの要因を捉えることを目的とする。

3. 方法・結果

3-1. 調査1:写真課題

3-1-1. 方法

被調査者は静岡大学教育学部附属静岡小学校5年生33名、6年生38名、計71名で調査は2013年6月に担任によって一斉配布にて行った。

実験刺激としては、小学校内の工事が施工されている校舎や校庭、それ以外の学校内の危険な場所と考えられる場所の写真8枚(図1)を用いた。具体的には、明らかに危険と思われる場所、危険はないだろうけれども危険表示がされている場所、校舎内で乱雑に什器が配置されていて日常的な危険を感じられるような場所を評定者2名が相談の上で課題に適していると思われる写真の選定を行った。それぞれの写真について①「危険」「危険ではない」「わからない」のどれだと思うか。②この8枚の写真の場所の中で一番「危険」だと思ふ場所はどこか。③一番「危険」だと思った理由を尋ねた。

3-1-2. 結果

(A) 「危ない場所」「危なくない場所」についての学年間の評価の差異

それぞれの写真について、学年(5年・6年)と判定(危険・危険ではない)の 2×2 のカイ二乗検定を行った。各写真の度数、カイ二乗値、 p 値については表1の通りである。8枚中5枚の写真(写真1、3、4、5、6)において有意な差が見られた。また、性差について検討を行ったが、小学6年生で写真6の1枚のみに性差がみられるという結果となった。 $(\chi^2 = 7.158 \ p = .007^*)$

(B) 一番「危険」だと考える場所についての学年間の評価の差異

一番危険だと思う写真を1枚選定もらったところ、写真2、4、5、8の4枚が選択された。この4枚の選択数に学年間の差異がみられるかどうかについて、学年(5年・6年)と選択数(写真2、4、5、8)の 2×4 のFisherの直接確率計算を行った。各写真の度数、カイ二乗値、 p 値については表3の通りである。学年間に統計的に有意な差は見られず、両学年とも写真2を一番「危険」として選択をするという結果となった。(小学5年81.8%、小学6年73.6%)。

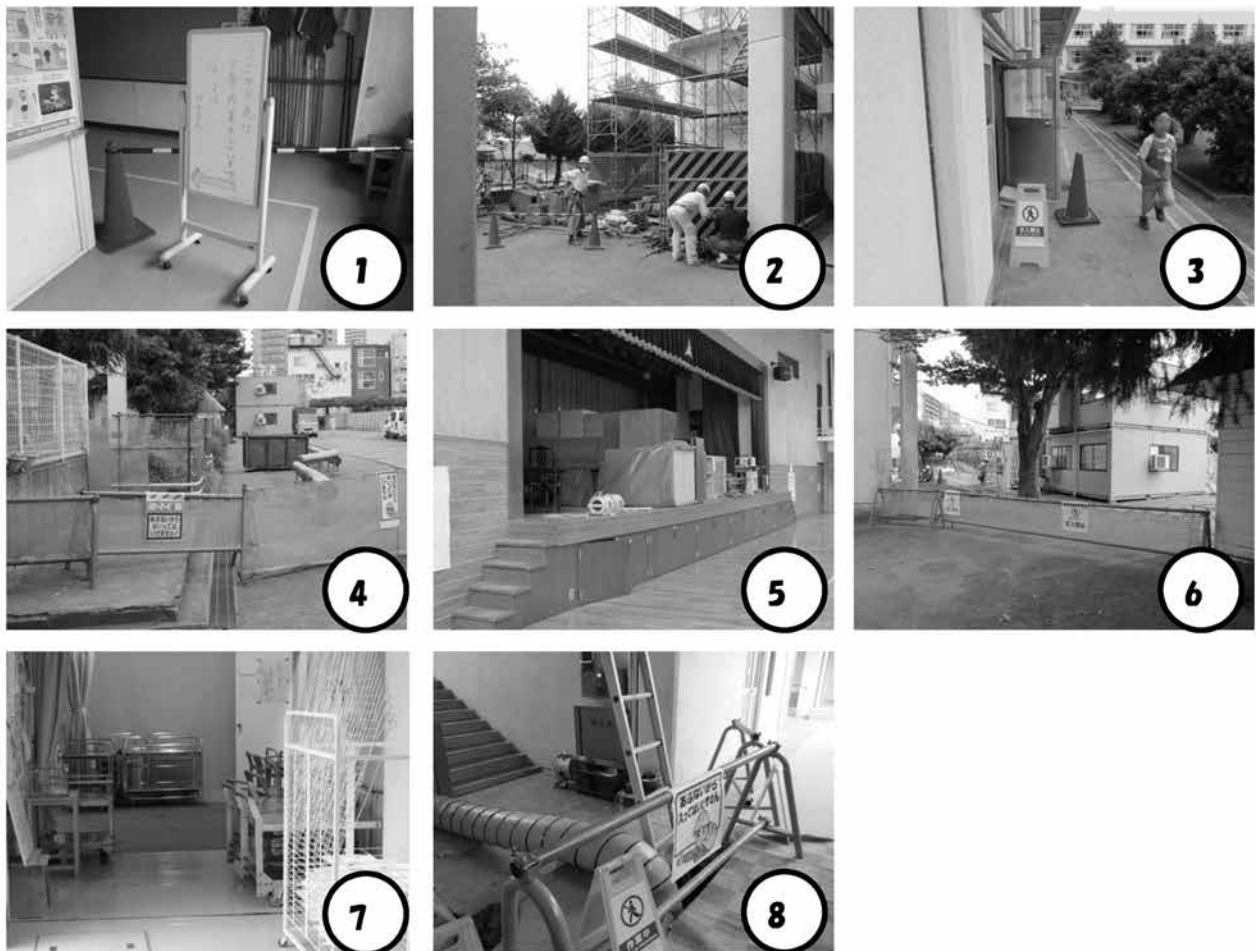


図1：写真判定課題提示刺激

表1：写真判定課題反応分布

		写真 1				写真 2				写真 3				写真 4							
		危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答				
5年	男子	17	10	3	3	1	16	0	0	1	7	4	4	2	14	0	2	1			
	女子	16	10	1	4	1	16	0	0	0	5	8	3	0	14	1	1	0			
	合計	33	20	4	7	2	32	0	0	1	12	12	7	2	28	1	3	1			
		60.6				12.1	21.2	6.1	97.0	0.0	0.0	3.0	36.4	36.4	21.2	6.1	84.8	3.0	9.1	3.0	
6年	男子	19	4	14	1	0	19	0	0	0	1	11	7	0	7	8	3	1			
	女子	19	3	16	0	0	18	1	0	0	4	13	2	0	11	5	3	0			
	合計	38	7	30	1	0	37	1	0	0	5	24	9	0	18	13	6	1			
		18.4				78.9	2.6	0.0	97.4	2.6	0.0	0.0	13.2	63.2	23.7	0.0	47.4	34.2	15.8	2.6	
合計	男子	36	14	17	4	1	35	0	0	1	8	15	11	2	21	8	5	2			
	女子	35	13	17	4	1	34	1	0	0	9	21	5	0	25	6	4	0			
	合計	71	27	34	8	2	69	1	0	1	17	36	16	2	46	14	9	2			
		38.0				47.9	11.3	2.8	97.2	1.4	0.0	1.4	23.9	50.7	22.5	2.8	64.8	19.7	12.7	2.8	
χ^2		24.483***				0.854				6.468*				12.406***							
		写真 5				写真 6				写真 7				写真 8							
		危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答	危険	危険ではない	わからない	無回答				
5年	男子	17	15	0	1	1	9	4	2	2	0	13	3	1	17	0	0	0			
	女子	16	13	1	2	0	13	2	1	0	1	9	6	0	15	0	1	0			
	合計	33	28	1	3	1	22	6	3	2	1	22	9	1	32	0	1	0			
		84.8				3.0	9.1	3.0	66.7	18.2	9.1	6.1	3.0	66.7	27.3	3.0	97.0	0.0	3.0	0.0	
6年	男子	19	12	6	1	0	2	12	5	0	2	15	2	0	18	1	0	0			
	女子	19	12	5	2	0	11	7	1	0	2	12	5	0	19	0	0	0			
	合計	38	24	11	3	0	13	19	6	0	4	27	7	0	37	1	0	0			
		63.2				28.9	7.9	0.0	34.2	50.0	15.8	0.0	10.5	71.1	18.4	0.0	97.4	2.6	0.0	0.0	
合計	男子	36	27	6	2	1	11	16	7	2	2	28	5	1	35	1	0	0			
	女子	35	25	6	4	0	24	9	2	0	3	21	11	0	34	0	1	0			
	合計	71	52	12	6	1	35	25	9	2	5	49	16	1	69	1	1	0			
		73.2				16.9	8.5	1.4	49.3	35.2	12.7	2.8	7.0	69.0	22.5	1.4	97.2	1.4	1.4	0.0	
χ^2		8.150**				8.846**				1.150				0.854							

(C) 一番「危険」だと考えた理由について

一番危険だと思う写真1枚を選定してもらうと同時になぜそれを一番危険だと考えたのかについて自由記述で回答を求めた。児童から得られた回答をまとめたものを以下に記述する。

a) 写真2の主な理由 (55名)

(1) 物の落下・飛来・崩壊

上から物が落ちてくる

鉄の棒が落ちてくる

鉄骨(足場・骨組み)が崩れる

何か飛んでくるかもしれない

(2) 接触

コンクリの塊

当たると痛い

(3) 場所特性

機械(ショベルカー等)が入ってきてるので

コーン1つで区切っただけ

b) 写真4の主な理由 (2名)

工事の人が出入りしていて、音になるくらいの工事があって、とっても危険な場所だと思ったから
クレーン等で大きな鉄骨が運ばれたりするから落ちたら危険

c) 写真5の主な理由 (7名)

ステージに物や危ないものがいっぱいおいてある
落ちてきたら下敷きになって死ぬ・ケガをする
器具の角が危ない

d) 写真8の主な理由 (7名)

変なホースがある

引っかかって転ぶ

はしごや機械がいっぱい

通路が狭い

小さな子が穴をよく覗き込んでいる

穴に落ちる可能性がある

3-2. 調査2: 平面図課題

3-1-1. 方法

被調査者は静岡大学教育学部附属静岡小学校5年生33名、6年生35名、計68名で調査は2013年6月に担任によって一斉配布にて行った。

調査方法は平面図課題を用いた。工事用図面を基に筆者が作図した小学校全体の平面図を用いた。(図2) 工事のために柵や囲いが設けられている部分についてもそのまま平面図に記述をした。この平面図に対して、①「危険」な場所に○をつける。②①で○を付けた中で一番「危険」だと思う場所に◎をつける。③一番「危険」だと思っ

た理由を尋ねた。

反応位置の評定方法

平面図を1辺約7.7ミリの正方形のマスに区切り(縦21マス×横32マス、計672マス)、どのマスに○が付けられているか判定を行い、児童の反応があった84マスについて機能別にカテゴリー化を行った。カテゴリーは最初15個に分類したあと、教室棟・特別教室棟(以下、特別棟と略す)・校庭・校庭以外の校舎外(以下、外部と略す)の4つのカテゴリーに分類をして分析を行った(図2・表2)。

3-2-2. 結果

(A) 「危ない場所」についての学年間の評価の差異

「危ない場所」として選択した場所について、学年間の差異がみられるかどうか、学年(5年・6年)とカテゴリー(教室棟・特別棟・校庭・外部)の2×4のFisherの直接確率計算を行った。各カテゴリーについての度数、カイ二乗値、 p 値については表3の通りである。学年間で有意な差は見られなかった。

(B) 一番「危険」だと考える場所についての学年間の評価の差異

「危ない場所」と考えた中から一番危険だと思う箇所1カ所に◎をふってもらった。「危ない場所」として選択した場所について、学年間の差異がみられるかどうか学年(5年・6年)とカテゴリー(教室棟・特別棟・校庭・外部)の2×4のFisherの直接確率計算を行った。各カテゴリーの度数、カイ二乗値、 p 値については表4の通りである。学年間で10%の有意傾向が見られた($p=0.090^*$)。

3-3. 調査3: 自由記述課題

3-3-1. 方法

被調査者は静岡大学教育学部附属静岡小学校5年生31名、6年生35名、計66名で調査は2013年6月に担任によって一斉配布にて行った。

調査方法は自由記述課題を用いた。学校内で「危険」だと考える場所をあげ、その理由を記述させた。

3-3-2. 結果

指摘場所については、表5の通りである。危険な場所はないと回答している児童が6年生で16名(45.8%)も見られた。具体的な指摘場所については、工事箇所に伴う危険箇所を指摘する意見が多かったが、そうではない箇所の指摘もいくつか存在した(くつばこ、教室、階段、駐車場等)

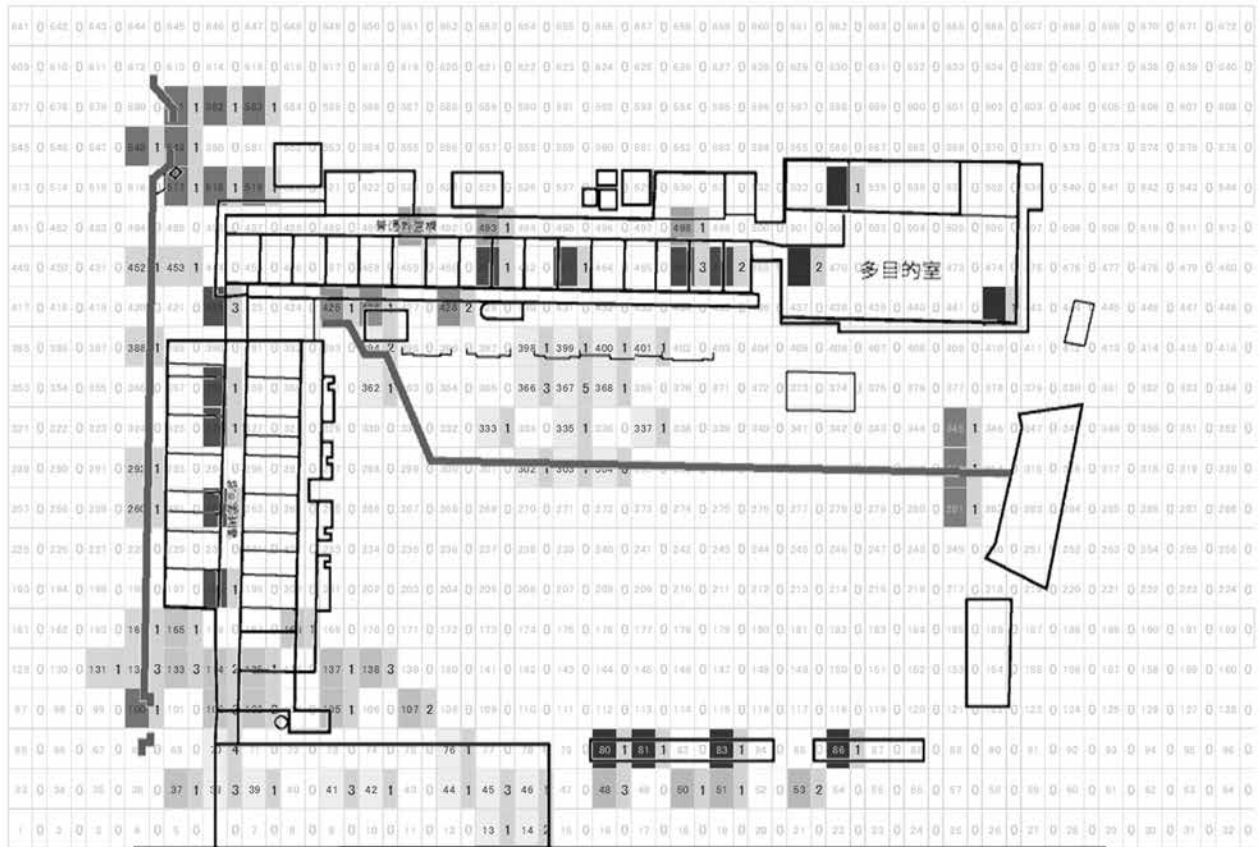


図2：平面図課題用刺激と総反応位置（数値はセル番号／反応度数）

表2：カテゴリー化一覧

[illegible]

表3：危ない場所のカテゴリー分布（学年別）

	教室棟	特別棟	校庭	外部	合計
5年	6	12	29	9	56
6年	7	9	12	3	31
合計	13	21	41	12	87

表4：一番危ない場所のカテゴリー別（学年別）

	教室棟	特別棟	校庭	外部	合計
5年	1	3	12	4	20
6年	4	10	7	3	24
合計	5	13	19	7	44

 $\chi^2=3.67372$, $df=3$, Fisherの直接確率計算 $p=0.313$ $\chi^2 = 6.71978$, $df = 3$, Fisherの直接確率計算 $p = 0.0904$

表5：自由記述課題指摘箇所

		指摘場所					
		運動場	運動場 (駐車)	階段	教室	くつばこ	体育館
男子		4	1	1	0	1	8
5年 女子		5	4	2	0	0	7
合計		9	5	3	0	1	15
男子		0	1	1	1	4	1
6年 女子		0	0	1	2	1	0
合計		0	1	2	3	5	1
男子		4	2	2	1	5	9
合計 女子		5	4	3	2	1	7
合計		9	6	5	3	6	16

		体育館前 の穴	ベランダ	特別教室 棟	その他	なし
男子		14	0	1	9	0
5年 女子		8	0	1	9	0
合計		22	0	2	18	0
男子		2	2	0	3	7
6年 女子		1	2	0	5	9
合計		3	4	0	8	16
男子		16	2	1	12	7
合計 女子		9	2	1	14	9
合計		25	4	2	26	16

4. 考察

4-1. 調査1：写真課題

4-1-1. 「危ない場所」「危なくない場所」についての学年間の評価の差異

小学5年生・6年生で「危ない場所」「危なくない場所」の判定が異なる写真が8枚中5枚あり、中でもネット張りの2枚の写真（ともに危険表示有）に学年差が見られたが5年生は危険と判断し、6年生は危険ではないと判断している。この学年差については本研究では明確な理由とは言及していないため推測の域でしかないが、1つはピアジェの発達段階で、6年生は形式的操作期に入っている児童が5年生よりも多く、そのことが判断基準の差異として現れていると考えられる。2つ目の理由としては、危険に関するメタ認知能力が5年生と6年生の間に差異があるのではないだろうか。他の課題の危険判断理由で、6年生は学校内で危険な場所はないという回答が多くみられていることから、この課題での危ない場所、危なくない場所の判定にも客観的視点で危険を捉えられるか否かが影響を及ぼしているのではないと思われる。

4-1-2. 一番「危険」だと考える場所についての学年間の評価の差異

一番危険な場所についての評価については、学年差は見られなかった。5年生、6年生ともに写真2の工事機材等をポールとコーン1つのみで仕切っている場所が最も多く選択されている。写真5と8もフェンス等の工事場所との明確な区切りがない場所が選ばれている。写真4については、フェンスとポールで工事現場を明確に区切っている写真であるが、6年生は1人も選択していないが、5年生では2名ではあるが1番危険な場所として選択をしている。この2名が最も危険だと考えた理由と

しては、フェンスの中での工事そのものの危険性について指摘をしている。この理由からも、自分自身が危険な目に合うかもしれないという視点で課題をとらえていなかった可能性もある。

4-1-3. 一番「危険」だと考えた理由について

多数の児童が、写真2を一番危険な場所と考えており、学年差は見られなかったため、高学年の児童からみて写真2が危険な場所という判断がされていることがわかる。物の落下・飛来・崩壊を一番「危険」だと考えた理由として多くあげているという結果から、静的な写真を見て児童は状況変化によって危険が起こる可能性があることを推測できると考えられる。また、高学年らしい理由として、「自分は大丈夫だけど小さい子が入り込んで穴を覗き込んでいるのが危険」など他者が危険になる可能性も類推ができています。しかしながら、多くの子どもたちが工事現場での物の落下の可能性を予測しそれを危険だと考えていること、なぜ物が落下してくることがより危険度が高まると考えているのかについての理論的な背景は、本調査では明らかにすることはできていない。今後子ども達に対する詳細なインタビュー調査等が必要かと思われる。更にこのような物の落下のような危険に対する類推は中学年でも行うことができるのかについての検討は今後の課題である。

4-2. 調査2：平面図課題

4-2-1. 「危ない場所」についての学年間の評価の差異

反応が見られた箇所を4つのカテゴリー（教室棟・特別棟・校庭・外部）にわけて、学年間に危ない場所として指摘している箇所に差異があるのかを検討したが、学年差を認めることはできなかった。写真判定課題においては学年差が認められたのに、この平面図課題では差が認められなかったことは、カテゴリーの区分が適切かどうかについて再度検討の必要性があるようにも思われる。

4-2-2. 一番「危険」だと考える場所についての学年間の評価の差異

一番危険だと思う箇所について4つのカテゴリー（教室棟・特別棟・校庭・外部）にわけて、学年間に危ない場所として指摘している箇所に差異があるのかを検討したところ、学年の違いに関する有意傾向を見出すことができた。5年生は校庭を一番危険と考えている子が多く、6年生は特別棟を一番危険と考えている子が多かった。校庭は、フェンスで仕切られた「危険」という表示がある工事箇所が多い。これは写真判定課題で5年生が危ないと指摘していた箇所に一致する。一方6年生が危

険と指摘している特別棟は、特別棟の一部が工事箇所になっていたり、工事によって空いている穴に比較的近づきやすい等の部分が見られる。この学年差の理由として、4-1-1で述べた危険に対するメタ認知能力の違いが考えられる。5年生は「危険」というラベルに対して危険だという判断を行っているが、6年生は状況の変化によって自分が危険に晒される可能性を客観的に類推ができていると考えられる。また、5年生は全員が危険な個所についてマーキングしているのに対し、6年生は8名が危険な場所はないと言っていることも大きな学年差ではないかと考えられる。

4-3. 調査3：自由記述課題

改装中の校舎という環境での調査のため工事箇所に伴う危険個所を指摘する意見はもちろん多かったが、そうではない箇所の指摘も4割弱みられた。(全103中、工事に関するもの63(61.2%)それ以外40(38.8%))また設備劣化等によるケガの危険性(実際にくつばこでトゲがささった子もいる)や、狭さに関する指摘も見られ、子ども達が日常生活の中で学校内での危険とを感じる場所はかなり多岐にわたっていることが示唆される結果となった。また、他の2つの調査と同様に体育館はステージ上の荷物の置き方が危険だと感じている意見が多く見られ、子ども達の多くが危険だと感じていることが明らかになった。

5. 展望

本研究の目的は小学校児童がどのように危険の発見や評価を行っているのかを調べることである。結果として小学5年生と6年生の間で「危ない場所」「危なくない場所」の判定が異なる写真が8枚中5枚(写真1、3、4、5、6)あり、性差が見られるものが1枚(写真6)あった。その差異として推測されるのは、1つはピアジェの発達段階で、2つ目は、危険に関するメタ認知能力と考えた。

子ども達に評価を尋ねている場所は、子どもたちが学校生活において立ち入っていい場所と立ち入ってはいけない場所が混在している。しかしながら平面図課題において6年では8名が危険な場所はないと回答しており、自由記述課題においては、危険な場所はないと回答している児童は16名にのぼり、6年生の45.8%は危険な場所はないと考えていることがわかった。危険はないと答えている回答の理由として、危険な場所があったとしてもそこは入ることができないから危険ではないとあり、危険が存在したとしても自分の身にとって危険であるかどうかを状況から判断を行えることが伺える。これは危険に対する客観的判断であるメタ認知が行えていると考えて差支えがないのではと思う。また、3つの課題において同じ個所について危険という指摘が見られた。特に

体育館はステージ上の荷物の置き方が危険だと感じている意見が多く見られ、この意見は3つの課題に対して共通して見られた。荷物の置き方のようなすぐに解決可能な危険個所に関する問題については事故等が起こる前に改善することが可能ではないかと思われる。定期的に子どもたちが学校内のどのような場所を危険と考えているかについての調査を行うことは、教師側は大丈夫とされている、子ども達は危険と感じている場所を把握するためにある程度有効な手段なのではないかという手ごたえを今回の調査から得ることができた。

危険を予測し回避すること、つまり危険予知力が働くかどうか問題となるのは一見危険がないように見えるが実際には事故が起こっているような状況下での判断になる。今回の調査から6年生になると多くの児童は危険に対する客観的判断が行うことができていると考えられる。今後は実際にケガをしてしまった児童に対して聞き取り調査を行い、なぜケガをしてしまったのか、児童はそのときに危険予知力といえるものを働かせていたのかどうかについて実態を把握したいと考えている。

今回の調査においては児童に結果のフィードバックを行っていない。自分の判断がどういう結果を生むのか子ども達自身が知ることは大事なことであり、そのような危険を伴う可能性がある場所ではどのように行動しなくてはならないのかを考える癖をつけていくことは再び同じ危険に合わないためにも大切なことである。知識を学んでも実際の行動が変わらないのでは全く意味がない。実際に遭遇した危険に対して自らの知識と行動を結び付けて、「正しい対応」をしないといけない。このことから子ども達に自分が行った判断に対するフィードバックを行うのは非常に重要なことだと考えられる。PISA調査の結果からも日本の子どもに足りない力は、『批判的リテラシー』だとされている。子どもたちは危険を含む可能性がある事象に対して判断を行った結果のフィードバックを受けた時、教えられたことをただ鵜呑みにするのではなく、「本当にそれでいいのか」「なんでそれではだめなのか」を考えられるようにならないと意味がないだろう。危険かどうかの判断を自ら行う機会を増やしていき(教師が教えるのではなく、子どもが自ら危険かどうかの判断をしていくこと)状況判断をする力をつけることために批判的リテラシーは有用な考えだと思われる。

【参考文献】

1. 文部科学省 小学校学習指導要領 2008
2. 文部科学省 小学校学習指導要領解説 総則編 2008
3. 文部科学省 現行の学習指導要領における食育・安全教育・性教育に関する指導 2007-09-14
4. 文部科学省 学校保健安全法 2000-06-18

5. 文部科学省 学校安全の推進に関する計画 2012-04-27
6. 宮田美恵子 危険人物との遭遇場面における子どもの危機認知と離脱行動に関する研究 Research on Children's Recognition of a Crisis, and Escape When They Encounter a Dangerous Person 発達心理学研究 21 (4), 396-404, 2010-12-20
7. 江尻桂子 幼児・児童における危険認知の発達：子どもの安全・防犯教育を考えるための発達心理学的アプローチ The Development of How Children Deal with Stranger Danger : A New Approach to Safety Education Based on Developmental Psychology 発達心理学研究 21 (4), 332-341, 2010-12-20
8. 清水由紀 幼児・児童は危険回避行動と向社会的行動のいずれを優先させるか：安全教育のデザインのための基礎的研究 Do Children Give Priority to Danger Avoidance or Prosocial Behavior? : A Fundamental Study on the Design of Safety Education 発達心理学研究 21 (4), 322-331, 2010-12-20
9. 内田伸子 仲真紀子 清水由紀 子どもの暮らしの安全・安心：子どもの安全教育の新しいアプローチ Safety and Security of Child Life : New Developmental Approaches to Safety and Prevention Education 発達心理学研究 21 (4), 309-310, 2010-12-20
10. 内田伸子 小林 肖 幼児は未知人物の誘いにどのように対処するか：子どもの安全・防犯教育の発達心理学的検討 発達心理学研究 21 (4), 311-321, 2010-12-20
11. 内田伸子 幼児における事象の因果的統合と産出, 教育心理学研究 33, 123-134, 1986
12. Tamis-LeMonda CS et al. When infants take mothers' advice: 18-month-olds integrate perceptual and social information to guide motor action. Dev Psychol 44, 734-746, 2008

Evaluation and Specification of “Danger” under the Unusual Condition to Primary School

Miho Kawai¹, Shin Murakoshi²

¹*Graduate School of Education Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Shizuoka University*

²*Faculty of Education, Shizuoka University*

Abstract

The purpose of this study is to be investigated finding and evaluation “danger” to Primary School Student. An experiment saw a picture of the dangerous location in the schoolhouse where construction in the elementary school is built and the school which aren’t school grounds and a construction part and the considered place and a plan and asked about specification and a reason of whether you think why it’s most dangerous of the value of the dangerous degree and the most dangerous location. The place where the grade difference is seen existed in a result about the value of the dangerous degree. The grade difference wasn’t judged by a picture problem about specification of most dangerous place, and a picture of the construction site and the place where I have no clear ends was chosen. The grade difference wasn’t judged by a plan problem about comment of dangerous place. The significant tendency about the grade difference was admitted to be most dangerous about a considered place.

Keywords

Primary school, danger, evaluation, specification